

報告

保育・幼児教育分野 FD プログラムの開発に向けた取組

塩川奈々美¹⁾・寺川夫央²⁾¹⁾ 徳島大学高等教育研究センター ²⁾ 今治明德短期大学幼児教育学科

要約：本研究は、SPOD フォーラム新規開講プログラム「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」の開発を巡る取組と成果について報告するものである。保育士養成課程の多くが幼稚園教諭養成課程を併設し、文部科学省が定める幼児教育の 5 領域を前提に各領域に関連する専門家が教員となるが、必ずしも教員に保育に関する知見は問われていないことから、科目間の整合性や教員が一丸となって教育改善に臨む上での課題が指摘されている。このような課題に対し、筆者らは、教員が抱える課題を明らかにし、ワークショップを通じて課題解決を目指す FD を企画立案するプログラムを開発した。本プログラムを通じて、参加者の授業を振り返る機会になること、分野に共通する課題や気づきが得られること、同様の悩みを共有することで教員らの不安感の軽減に繋がることが示唆された。一方、十分な議論の時間確保や講師陣による支援の在り方についての課題も指摘された。

(キーワード：高等教育, 分野別 FD, FD 開発, 保育・幼児教育分野)

Initiatives to Develop FD Programs in the Fields of Childcare and Early Childhood Education

Nanami SHIOKAWA¹⁾ Fuo TERAGAWA²⁾¹⁾ Research Center for Higher Education, Tokushima University²⁾ Department of Early Childhood Education, Imabari Meitoku Junior College

Abstract: This study reports on the development and outcomes of a newly launched faculty development (FD) program titled "Designing FD for the Field of Early Childhood Education and Care," offered at the SPOD Forum 2025. Many childcare training programs are offered alongside kindergarten teacher training courses, where subject-specific instructors are appointed based on the five domains of early childhood education defined by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). However, they are not necessarily required to have expertise in childcare, which has led to challenges in ensuring curricular coherence and in promoting collaborative educational improvement among faculty members. To address these issues, we developed a program in which participants identify challenges faced by instructors in this field and collaboratively design FD initiatives through workshops. The program provided participants with opportunities to reflect on their own teaching practices, gain insights into common issues across the field, and alleviate feelings of uncertainty by sharing similar concerns with peers. On the other hand, the need to secure sufficient time for group discussions and to enhance facilitator support during discussions were identified as areas for improvement. These findings suggest directions for further refinement of the program.

(Keywords: higher education, discipline-specific faculty development, faculty development program design, field of early childhood education and care)

1. はじめに

文部科学省は幼稚園教育要領「第 2 章 ねらい及び内容」において、幼稚園修了までに育成することが期待される「生きる力」の基礎となる心情、意欲、態度について示しており、これらは一般的に「5 領域」と呼ばれる (表 1)¹⁾。また、保育士

資格の管轄であった厚生労働省^{注 1)}では「保育所保育指針」が示され、2017 年の改訂時には幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育保育要領で一層の整合性が図られた²⁻³⁾。保育士及び幼稚園教諭 (以下、保育士と言う) の養成を担う高等教育機関 (以下、保育士養成校

表 1 幼稚園教育要領「第 2 章 ねらい及び内容」における 5 領域 (文部科学省 1989)

ねらい	内容
健康	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
人間関係	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。
環境	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
言葉	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
表現	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

と言う)においては、それぞれの分野の専門家が各々の専門性に基づく保育内容の 5 領域に関する科目を担当する。この教育体制により、高い専門的知識・技能を教授する教育を実現していると言える。一方で、教員に保育に関する知見の有無が問われていないことや、科目間での整合性や連関が十分に図られていない点が課題として指摘されている⁴⁾。

本稿は、SPOD フォーラム 2025^{注2)}で新たに開講した FD プログラム「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」において実施したワークショップについて、その試行会とフォーラム当日の取組および成果について報告するものである。

SPOD フォーラム 2025 における新規開講プログラム「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」は SPOD-FD 調査研究プロジェクトの一環で開発されたプログラムである。SPOD-FD 調査研究プロジェクトは SPOD を運営するコア校(愛媛大学, 香川大学, 高知大学, 徳島大学)メンバー有志を中心に構成される調査研究プロジェクトであり、複数のプロジェクトが稼働している。筆者らは「分野別 FD プログラム開発」をテーマに保育・幼児教育分野 FD 開発に取り組んでおり、本プロジェクトをきっかけに SPOD 加盟校における担当者との連携のもと、保育・幼児教育分野の FD プログラム開発企画が実現した。ワークショップ試行会から SPOD フォーラム 2025 におけるプログラム実践を通じて得られた成果や課題、参加者視点による意見を整理し、今後の展望を述べる。

2. 保育・幼児教育分野の現状と課題

2.1 保育・幼児教育分野の現状

保育士は一般に 0 歳児から未就学児を対象とした教育を担う。近年の急速な社会構造の変化に伴い、保育士養成課程における学生、教員、また養成校そのものの多様化が指摘される。矢藤(2022)は平成の 30 年間に於いて保育士養成校の数が倍増したことを指摘し、教育を担う教員や養成校そのものの多様化の可能性について述べた⁵⁾。従来、保育士養成校は短期大学や専修学校による 2 年制が主流であったが、養成校の増加に伴い 4 年制大学が増加したことも多様化の一因と考えられる。さらに、保育・幼児教育の現場では、保育の質向上は言うまでもなく、共働き世帯や貧困世帯の増加、障害をもつ子どもや外国をルーツとする子どもへの支援対応、安全確保・事故防止に個人情報保護など、複雑化する様々な社会的課題への対応が求められているという^{注3)}。OECD (経済協力開発機構)において乳幼児の保育・教育は重要な目標として位置付けられており、保育者の専門性や教育力の向上が目指されるが、日本においては保育士資格の高度化や階層化、社会的地位の向上が課題であるとの指摘もある⁵⁻⁶⁾。

保育士資格はこども家庭庁^{注2)}管轄、幼稚園教諭は文部科学省管轄であり、それぞれが担う役割や対象とする年齢に違いはあるものの、「就学前の子どもへの教育」という点で共通しており、保育士養成校の約 8 割が幼稚園教諭の養成課程を併設しているなど⁵⁾、保育士養成校には資格取得に向けた相互のカリキュラムの整合性が図られている。

2.2 保育・幼児教育分野における課題と FD ニーズ

保育・幼児教育分野の専攻を有する大学・短期大学は保育士養成校としてこれらの資格をもつ人材輩出を担ってきた。2.1 節や注 3 で述べたように近年の社会変化に伴い、保育・幼児教育分野の現場において対応を迫られる課題も多様化しており、こうした問題に適切に対応できるよう保育士資格の高度化の必要性も指摘されている⁵⁾。

学生の将来像である保育士に多様な業務内容が要求されている現状があることは、保育士養成課程の教育現場においてそれらに対応する技能を身に着けることが求められていることと同義である。その教育を担う保育士養成校の教員は関連する教育活動上の課題を抱えていることが想定されるが、各教員の専門や担当する科目の違いが大きいため、高等教育機関における保育・幼児教育分野において教育改善を図るためには、教員一人ひとりが幼児教育の 5 領域における深い専門性を養うだけでなく、教科横断的な視点から授業改善に取り組む姿勢が求められる。

筆者らが企画したワークショップは、担当教科の内容に関わらず、「保育・幼児教育分野の担当者」が集まり、意見交換することを通じて、共通の課題意識を明らかにし、専門分野の垣根を超えて教育改善を目指す取組である。このように、保育・幼児教育分野の担当者が連携して FD プログラムの開発に取り組むことは、保育士養成課程の教育の質保証において重要な取組であると言える。

3. ワークショップ試行会の内容及び成果

3.1 ワークショップ試行会の概要

SPOD フォーラム 2025 で新規開講したプログラム「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」は、FD 企画の基本や保育・幼児教育分野の大学教育の現状や課題について学びつつ、参加者がワークショップを通じて保育・幼児教育分野の教職員を対象とした FD を企画立案することを目的とした FD である。当 FD は「FD が求められる背景や企画する際の留意点を説明することができる」「保育・幼児教育分野担当者が抱える FD ニーズを挙げることができる」「保育・幼児教育

分野 FD の企画立案ができる」ことを到達目標とし、序盤に FD の意義や企画方法に関する講義と保育・幼児教育分野における FD の意義や課題に関する講義を行い、その後三段階のワークを通じて参加者に保育・幼児教育分野のための FD を企画してもらう構成をとった。

フォーラム当日のワークショップをより良いものにするために、事前のワークの流れや内容を確認する必要があったことから、「保育・幼児教育分野 FD ワークショップ試行会」(以下、試行会)を企画し、SPOD 加盟校の保育・幼児教育分野の担当教員に呼びかけ、有志を募った。結果として企画者である筆者ら以外に保育・幼児教育分野の教員 3 名の協力を得ることができ、講師 1 名、ワークショップ参加者 2 校 4 名での試行会が実現した(表 2)。参加者は全員が現役の保育・幼児教育分野の担当教員であり、担当する保育内容の領域は「健康」「人間関係」「環境」「表現」など多岐にわたる。保育者養成校における教員歴は長短様々であり、保育の現場経験がある教員も含まれる。

試行会実施にあたっては、事前にプログラム等の実施要項やワークシートなどの資料を共有し、参加者に当日の流れを把握してもらった上でご参加いただいた。

試行会では、プログラム当日の流れを踏まえ、FD を企画する際に検討すべきことについて講義を行った後にワークショップを実施し、その後参加者全員による意見交換会を行った(表 3)。

3.2 ワークショップの内容

ワークショップでは佐藤ほか編(2016)で説明される FD 実践の 5 つのステップを参考に、ワーク 1 からワーク 3 にかけて 3 段階の構成をとった。FD 実践の 5 つのステップは FD を企画実施するにあたり取るべき工程を STEP1 「ニーズの把握」、STEP2 「企画立案」、STEP3 「広報」、STEP4 「実施」、STEP5 「評価・報告」の 5 段階で解説したものである。今回設計したワークショップはこの 5 段階のうち、STEP1 「ニーズの把握」～STEP2 「企画立案」の内容に該当する(図 1)⁷⁾。プログラムの参加者は「保育・幼児教育分野担当者」であることが条件付けられていることから、FD に関す

表 2 「保育・幼児教育分野 FD ワークショップ試行会」の概要

日時	2025年5月22日(木) 13:30-15:30
場所	今治明德短期大学1号館3階133教室
目的	SPODフォーラム2025で実施予定の「保育・幼児教育分野のためのFDを企画しよう」プログラムにおけるワークショップを事前に検証し、その内容と方法の課題を検討すること
到達目標	<p>① SPODフォーラム2025で実施予定の「保育・幼児教育分野のためのFDを企画しよう」プログラムにおける講義・ワークショップを体験し、参加者によるFD企画を立案することができる。</p> <p>② プログラム全体やワークショップの内容について良かった点や課題点を挙げるができる。</p>
方法	対面開催(講義・ワークショップ形式)
ワークショップ参加者数	保育・幼児教育分野の教員4名 (内訳) 今治明德短期大学教員3名(うち企画者1名を含む) 徳島文理大学短期大学部1名
講師・司会進行	塩川奈々美(徳島大学高等教育研究センター)

表 3 「保育・幼児教育分野 FD ワークショップ試行会」のプログラム

時間	内容
13:30 ~ 13:35 (5分)	開会挨拶, 趣旨説明
13:35 ~ 13:45 (10分)	参加者自己紹介
13:45 ~ 14:00 (15分)	講義: FDを企画しよう
14:00 ~ 14:10 (10分)	ワーク1(個人): 担当科目と課題意識の整理
14:10 ~ 14:30 (20分)	ワーク2(グループ): FDのレベルと実施に向けた優先順位の整理
14:30 ~ 14:50 (20分)	ワーク3(グループ): 課題に基づく企画立案
14:50 ~ 15:20 (30分)	意見交換会
15:20 ~ 15:30 (10分)	閉会挨拶, 写真撮影

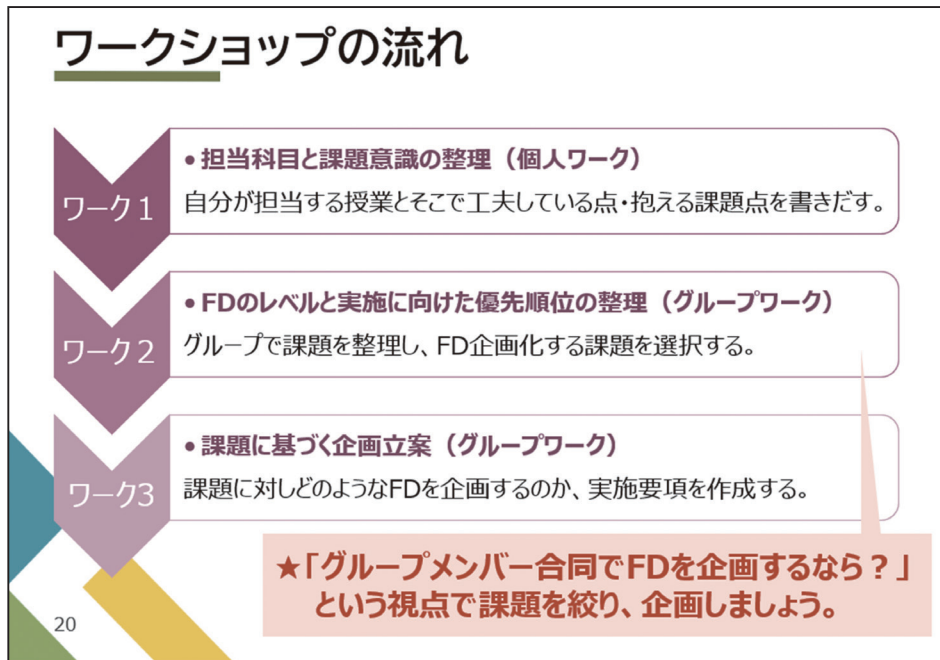


図1 「保育・幼児教育分野のためのFDを企画しよう」ワークショップの流れ

る経験に差があることが想定される。参加者の課題意識を丁寧に整理したうえで、保育・幼児教育分野教員のニーズに基づくFDの企画立案を目指した。

ワーク1では「担当科目と課題意識の整理」を行うことを目的とした個人ワークとして、参加者自身が担当する授業科目を洗い出し、それらの授業で工夫している点と抱える課題点を書き出す作業を行った。ワークシートには「講義形式－実習・演習形式」「初年次－高学年次」の2軸を設けており、授業の性質に合わせて授業科目名を記載した付箋を配置し、それぞれの科目について工夫している点や課題点を書き出した付箋を紐づけ、整理した(図2)。この作業により、参加者一人一人が自身の教育活動の状況や位置づけを可視化することができ、さらに自身の教育活動の良い点・課題点を振り返る機会を持つことで参加者個人の教育活動上の課題意識を明らかにすることができる。

ワーク2より「FDのレベルと実施に向けた優先順位の整理」を目的にグループワークの体制を取った。ワーク1で整理した個人の課題意識を持ち寄り、ワークシートに沿って課題を整理し、FD企画化する課題を選択する段階である。ワー

クシートにはFDレベルとして「個人レベル－組織・分野レベル」、FD企画化すべき優先度の高低「優先度低い－優先度高い」という2軸を設けた。参加者が挙げた課題をFD化するにあたり、マクロ(管理者・大学組織レベル)、ミドル(カリキュラムレベル)、マイクロ(授業レベル)⁸⁾のどの対象になるのか、また、その企画の緊急性がどうであるかを検討して付箋を配置させた(図3)。また、議論の最中に着想を得た新たな課題や書き出した課題の共通点など発見があった場合は適宜加筆して良いものとし、グループメンバー共通の課題意識を明らかにすることを目指した。FD企画化する課題の選定にあたっては、「グループメンバー合同でFDを企画するなら」という視点で課題を選択することを条件とし、検討を行った。

最後のワーク3では「課題に基づく企画立案」を目標に、FD企画の実施要項を作成した。ワーク2で選定したFD企画化したい課題を取り上げ、この課題を解消するにはどのようなFDを実施したらよいかを議論した。ワークシートにはFD企画を行う際の基本的な要項を見出しとして設けており、これに沿って情報を整えることで、グループで企画したFDが立案されるという形をとった(図4)。

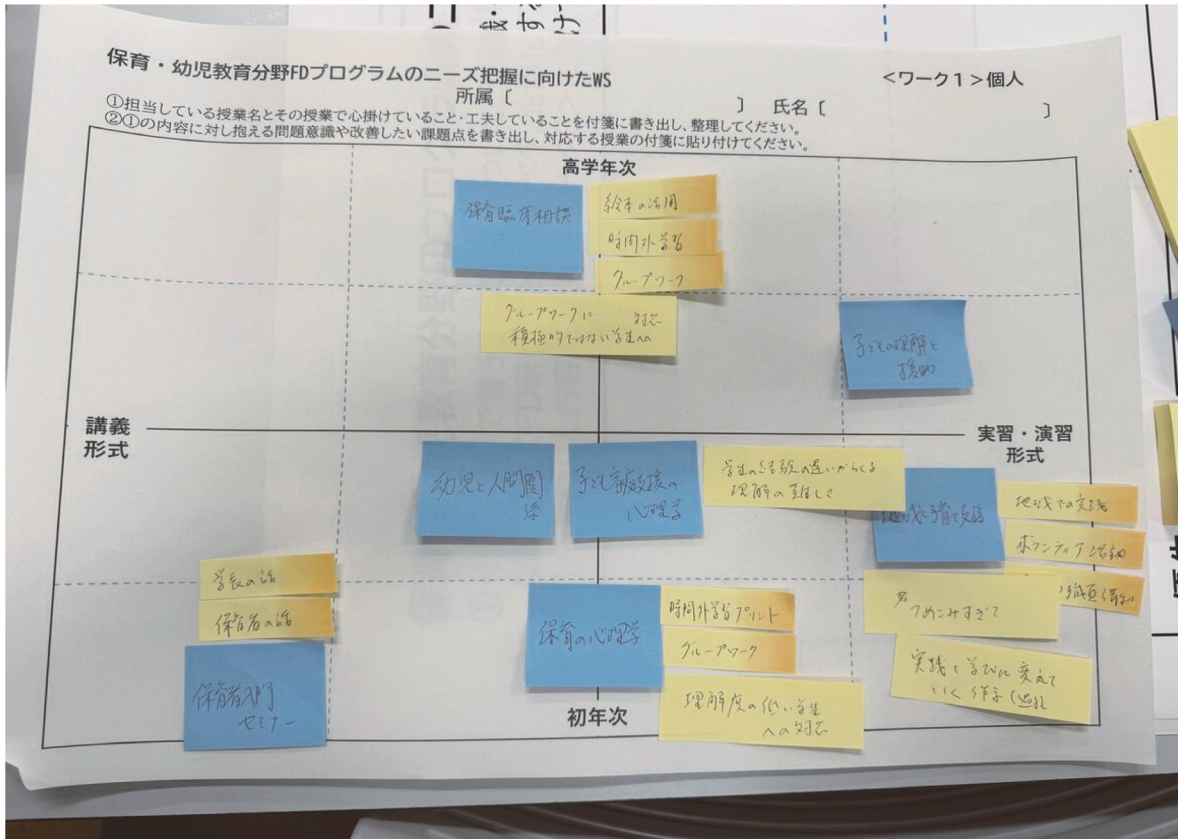


図 2 ワークショップ試行会における参加者の成果物 (ワーク 1)

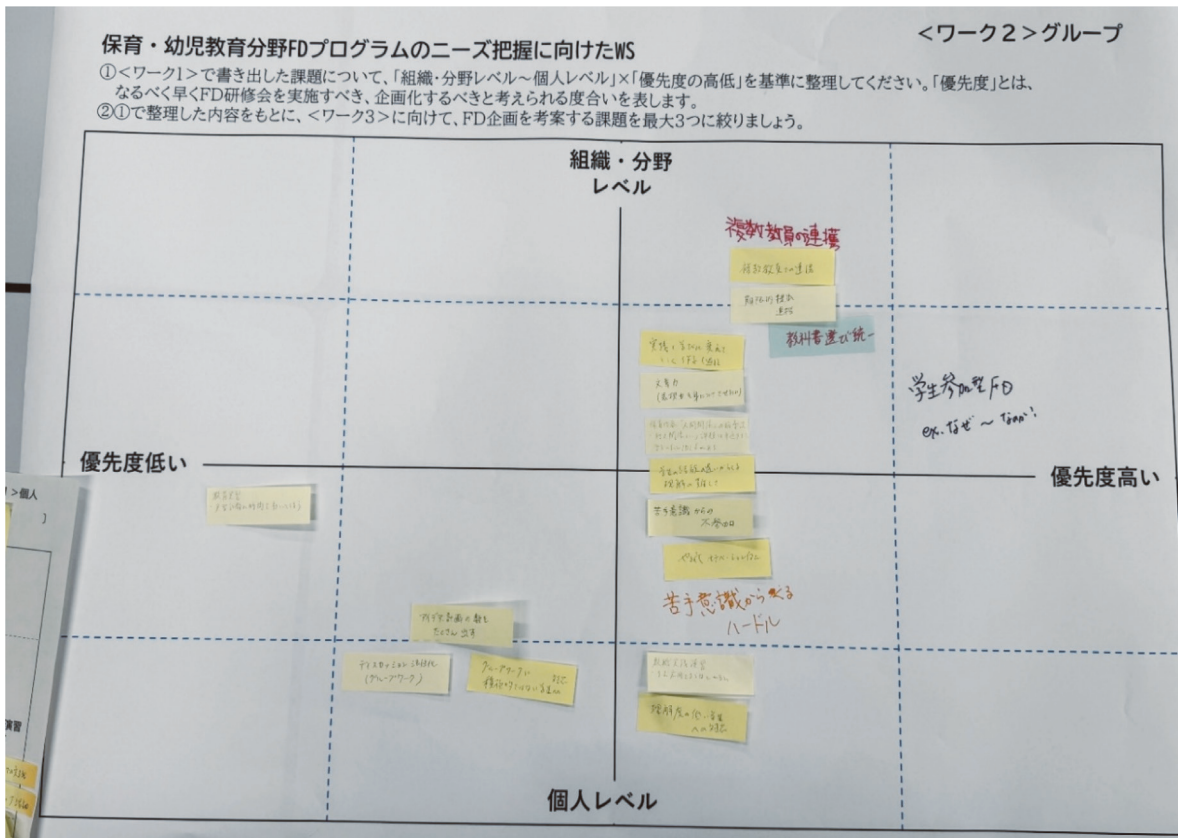


図 3 ワークショップ試行会の成果物 (ワーク 2)

<ワーク3>グループ

保育・幼児教育分野FDプログラムのニーズ把握に向けたWS

①ワーク2で挙げられた課題点のうち、FD研修会を開催し、改善に取り組みたいものを(1)問題意識・課題点に挙げましょう(最大3つ)。
②①で挙げられた課題点から、「研修の目的→目標」を整理し、FDプログラムの企画概要を計画しましょう。

(1) 問題意識・課題点	(2) 研修の目的・狙い →達成	(3) FDプログラムの企画概要
<p>①</p> <p>苦手意識からくるハードル</p>	<p>目的:</p> <p>対人関係の改善、学生の苦手意識を克服する</p> <p>目標:</p> <p>学生の苦手意識を克服し、理解しやすくなるように授業改善を行う</p>	<p>プログラム名:</p> <p>対象者・定員:</p> <p>実施形態・日時(期間)・場所:</p> <p>概要:</p> <p>主催:</p> <p>学生が「何で苦手で何が苦手か」をアンケート調査し、教員側の子ども視点から、学生の意見と先生側の意見の両方から、学生の教育 6~8人 (各2名)</p>
<p>②</p>	<p>目的:</p> <p>目標:</p>	<p>プログラム名:</p> <p>対象者・定員:</p> <p>実施形態・日時(期間)・場所:</p> <p>概要:</p> <p>主催:</p> <p>夏休みに徳島文理大学 短期研修 新卒研修</p>
<p>③</p>	<p>目的:</p> <p>目標:</p>	<p>プログラム名:</p> <p>対象者・定員:</p> <p>実施形態・日時(期間)・場所:</p> <p>概要:</p> <p>主催:</p>

図4 ワークショップ試行会の成果物 (ワーク3)

3.3 ワークショップ試行会の成果

ワーク2の議論を通じて、FDテーマとする課題には学生にみられる「苦手意識からくるハードル」が選出された。これを基に作成されたFD企画案は表4の通りである。

保育士養成課程においては、保育の実践に必要な「5領域」に関連する知識・技能の習得が必須であり、授業ではこれらに基づくパフォーマンスが求められる。しかしながら、学生が抱える苦手意識がパフォーマンスを抑制する傾向にあり、これにより授業の進行が停滞し、さらに学生自身の技能修得が阻害される状況が生じていることが指摘され、解決に向けて取り組むべき課題として共有された。参加者においては、このパフォーマンス抑制に繋がる苦手意識の特性を学生視点から把握し、その知見を踏まえた授業改善を行うことで、保育士養成課程全体の教育改善に繋がりたい狙いがある。

また、試行会の本来の目的であったワークの内容に関する改善点把握に向けた意見交換会でも、

有益な意見を得ることができた。(表5)

まず、ワーク1について、ワークの内容について事前に案内があったことでスムーズに取り組むことができた点が評価された。ワーク1の時間配分は10分、解説の時間を除くと8分程度と限られた時間の中で担当科目とそれらの授業で工夫している点・課題意識を紐づける必要があったため、事前の案内によって準備できていたことが取り組みやすさに繋がったものとみられる。挙げられた課題として、参加者によって担当科目数が異なるため、担当科目が多い参加者には付箋への書き出し作業の負担が大きくなることが指摘された。これについては書き出す担当科目を最大3科目に限定する改善を行うこととした。

ワーク2では、分野共通の課題について他大学の担当者と共有できたことへの高い満足度が示された。参加者はこれまで、日常的な業務で感じる課題意識や悩みを学外の同じ分野の担当者と意見交換する機会が不足していたことから、閉塞感や孤独感を感じていたが、今回のワークを通じてそ

ういった心理的負担が軽減したという意見が確認された。一方、改善点として、ワーク 2 の分析軸が意味する「優先度」の高低に関する意味が不明瞭であった点、および組織レベルの FD に関する議論は参加者の教員暦や FD 委員などの委員会業務経験の有無が議論への参加の障壁となり得る可能性が指摘された。

まず、分析軸の「優先度」の意味については、「一般的な大学生が求められる知識・技能」に対して「保育・幼児教育分野の学生に求められる知識・技能」に関する課題を FD 化する優先度の高い課題として位置付けたことから、指標の名称を<一般的な大学生が求められる知識・技能-保育・幼児教育分野の学生に求められる知識・技能>へと表現を置き換えることとした。これにより、保育幼児教育分野に所属する学生にとってより必要と考えられる観点で課題を検討することができる。また、参加者の教員暦や FD 関連業務の経験の多寡については、フォーラムで実施する際には事前

表 4 ワークショップ試行会で企画された FD 案

企画名	学びのチャンスを逃さない! 学生の苦手意識と向き合うWS
背景・目的	保育士養成課程における自己表現が求められる場面で、学生に苦手意識からパフォーマンスを抑制する傾向が認められる。保育士は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にわたる知識・技能を修得する必要があり、苦手なことにも積極的に挑戦する姿勢が求められる。 そこで、学生と教員がそれぞれの視点から学生の苦手意識について理解を深めるワークショップを実施する。このワークショップを通じて、学生は他者と意見交換しながら自身の学びについて振り返る機会を得ることができる。また、教員は学生の苦手意識への理解を深め、自身が担当する科目について学生がより参加しやすい授業へと改善することを目指す。
目標	1. 学生の苦手意識がどこからきているのかを理解する。 2. 学生の苦手意識の特徴を踏まえた授業設計ができる。
対象者定員	・今治明德短期大学および徳島文理大学短期大学部の保育・幼児教育分野の学科教員6~8名 ・学生6~10名(有志)
開催時期場所	夏休み期間(令和8年度) 徳島文理大学・高松キャンパス(予定)
内容	・保育士養成課程の学生が、何が苦手な何故苦手なのか(どのような苦手意識を持っているのか)を知るためのワークショップを行う。 ・事前に各校の学生に対しアンケートを実施し、広く学生の意見を聴取する。その結果をワークショップ参加者間でも共有する。 ・ワークショップでは学生グループ・教員グループを作り、それぞれの立場から意見を出し、シェアする。 ・教員はワークショップの結果を踏まえて、担当授業の設計の見直し、提案を行う。

表 5 意見交換会で挙げられた意見

プログラム	寄せられた意見
<ワーク1> (個人ワーク)	○事前に案内があったのでスムーズに取り組めた。 △担当科目が多いと書く作業の負担が大きい。 →書き出す科目を任意の3科目程度に限定する。
<ワーク2> (グループワーク)	○分野が共通していることでメンバー共通の課題認識を発見できた。 △ワークシートの「優先度」の意味が分かりづらい。 →「保育・幼児教育分野人材にとって必要な技能」 ↔「一般的に大学生に求められる技能」という視点に書き換える。 △組織レベルの議論は教員経験の長さによる。 →参加者リストが入手可能であることから、職階や所属を考慮して構成する。
<ワーク3> (グループワーク)	○実現可能性を意識しながら、具体的に議論することができた。 △初対面の参加者同士かつ初めてFD企画を行う参加者もあり、議論の時間を十分に確保する必要がある。 →考案する企画は1つに絞り、全体の時間配分を見直すなど、時間的な余裕を確保する。

○：良かった点、△：改善点

の確認事項で全参加者の情報を収集し、経験を考慮したグループ構成を検討することで対応することとした。

最後にワーク 3 について、実現可能性を意識しながら取り組んだことで、より具体的な議論が展開したことが評価された。ワーク 3 では「グループメンバー合同で FD を企画するなら」という条件付けがなされていたため、具体的な企画内容の検討に留まらず、企画実現に向けて今後の調整に関する合意形成がなされるなど、大学間連携による保育・幼児教育分野 FD 開催に向けた機運が高まった。また、今回の試行会における参加教員は、所属を同じくする者を除きほとんどが初対面という状況下での取り組みであった。限られた時間の中でのワークであったにも関わらず、参加者の所属分野が共通している前提もあり、メンバーの課題意識の共有とともに連帯感の醸成にも繋がったものと推察される。ワーク 3 の改善点としては、作成する企画案は 1 つに限定し、議論の為の十分な時間を確保できるようにすることが指摘された。

4. SPOD フォーラム 2025 でのプログラム実施及び成果

試行会でのフィードバックを受けて、ワークショップの内容に関する改訂を行い、2025 年 8

月 28 日 (木) に徳島大学常三島キャンパスで開催された SPOD フォーラム 2025 において「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」を実施した。新規開講プログラムであり、かつ参加条件を「保育・幼児教育分野担当教員」と限定した上での実施であったが、定員 12 名に対し、9 名の参加者が集まった^{註4)}。なお、SPOD フォーラム 2025 での参加者 9 名には試行会参加者 2 名が含まれるが、他の参加者と同様一参加者として参加いただいた。当該の 2 名にはグループ内でファシリテーターを担うなどの役割は特に与えていないが、経験者であることを考慮し、同じグループにならないよう配置した。また、これら 9 名の参加者に対しては事前課題として「勤務経験 (年数)」「担当科目」「FD 経験」について尋ねており、グループ分けを行う際の参考にした。このほかグループ分けを行うにあたっては同じ大学の教員が偏らないようにすること、議論が深まるよう教員経験や FD 経験の豊富な者と経験の浅い者とが混在するよう配慮した。参加者情報とグループ構成の内容は表 6 の通りである。

4.1 ワークシート改訂とワークショップの実施

試行会でのフィードバックを受けて、ワークショップで用いるシートを改訂した。主にワーク 2 及びワーク 3 の見直しを中心となった。

ワーク 2 については分析軸のわかりにくさが課

題であった。改訂内容は 2.2 で記載した通りであり、横軸の指標の名称をく一般的に大学生が求められる知識・技能—保育・幼児教育分野の学生に求められる知識・技能>へと表現を変更し、これに合わせてシート上部の説明文も変更した。改訂版のシートは図 5 に示す。

次に、ワーク 3 ではより直感的に実施要項を作成できるように、各項目に付箋のサイズに合わせた枠を設け、枠内にはそこに整えるべき情報の説明や具体例を記載する方式をとった。これにより、講師陣のサポートが入らない時間にもグループメンバーで検討することができ、限られた時間内で作業を進めるために分担して作業に取り組めるような様式にした。改訂版のシートは図 6 に示す。

加えてプログラム全体の時間配分を見直したことでワーク 3 の議論の時間を当初配分していた 20 分 (表 3) から 30 分に拡大することができた (表 7)。

表 6 に示す通り、当日のワークショップは 3 名 1 組で 3 つのグループを設け、表 7 に示す流れでプログラムを実施した。結果として、3 グループいずれもが FD プログラムを立案することができ、全体共有を行うことができた。

表 6 SPOD フォーラム 2025 における参加者情報とグループ構成

グループ	勤務経験	担当科目	参加	企画	業務
A	10 年以上	教育学	◎	△	△
	10 年以上	保育内容 (健康)	○	○	○
	1 年目～5 年未満	その他 (事務職)	◎	◎	◎
B	10 年以上	教育学	◎	△	○
	1 年目～5 年未満	その他 (ソーシャルワーク)	○	△	△
	5 年～10 年未満	保育内容 (表現: 音楽, 体育, 芸術)	△	△	△
C	1 年目～5 年未満	保育内容 (環境)	△	△	△
	10 年以上	保育内容 (表現: 音楽, 体育, 芸術)	○	○	○
	1 年目～5 年未満	保育内容 (人間関係)	○	△	△

◎ 何度も経験している
 ○ 経験したことがある
 △ 未経験である
 ■ 試行会参加者

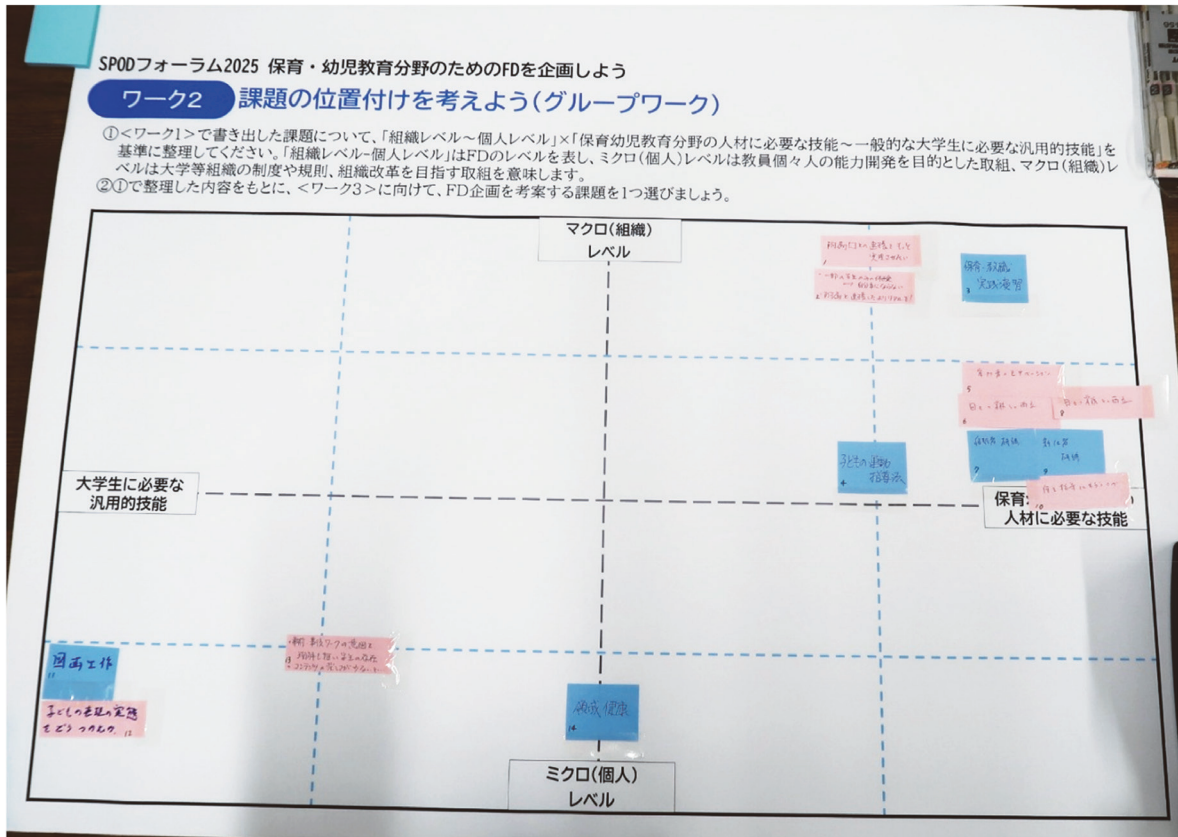


図 5 SPOD フォーラム 2025 ワーク 2 改訂版

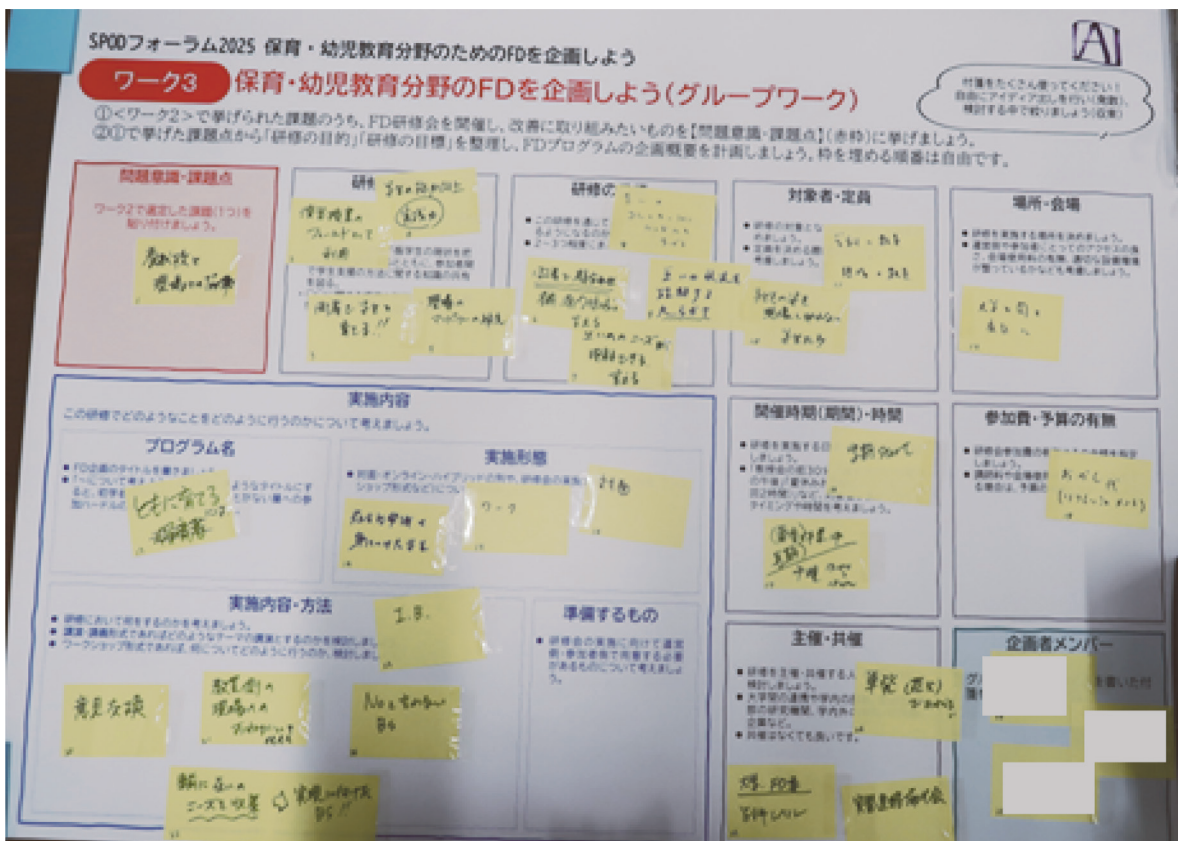


図 6 SPOD フォーラム 2025 ワーク 3 改訂版

表 7 SPOD フォーラム当日のプログラム構成

時間	内容
10:00 ~ 10:03 (3分)	会場係からの説明
10:03 ~ 10:20 (3分) (4分) (10分)	オリエンテーション ① 講師自己紹介 ② セッションの到達目標 確認 ③ セッションの内容説明 ④ アイスブレイク：グループ内での自己紹介，1人3分程度
10:20 ~ 10:25 (5分)	FD 概論
10:25 ~ 10:35 (10分)	保育・幼児教育分野における FD の位置づけ，ニーズ等
10:35 ~ 10:45 (10分)	FD 企画・事例紹介
10:45 ~ 10:55 (10分)	ワーク 1 (個人) (担当授業と問題意識の整理)
10:55 ~ 11:15 (20分)	ワーク 2 (グループ) (実施レベルと優先順位の整理)
11:15 ~ 11:45 (30分)	ワーク 3 (グループ) (課題に基づく企画立案)
11:45 ~ 11:55 (10分)	セッションのまとめ ① 各グループの意見共有 (代表者による議論の振り返り) ② 全体の質疑応答 (参加者より)
11:55 ~ 12:00 (5分)	会場係からの説明

4.2 フォーラム参加者の感想

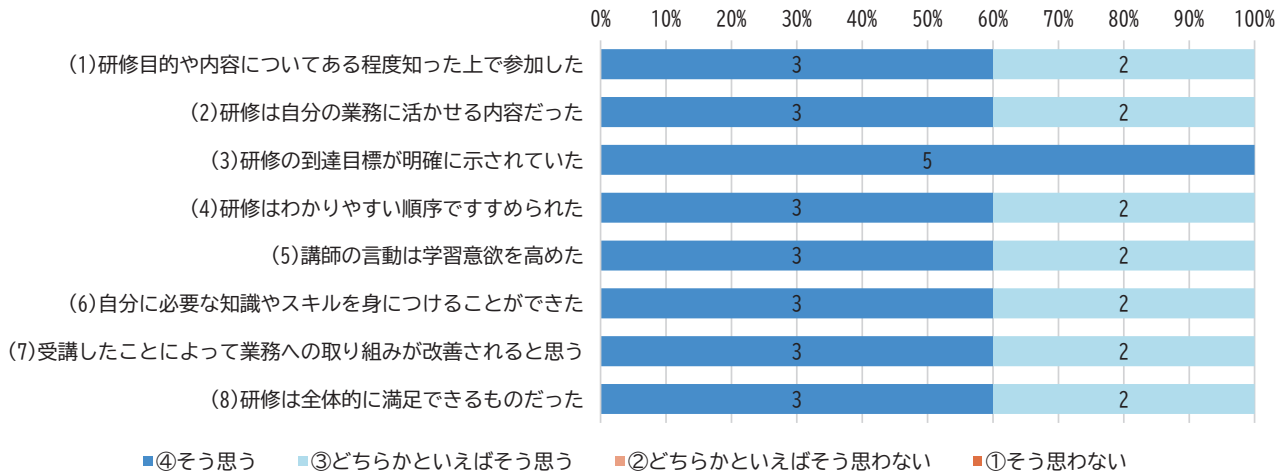
SPOD フォーラム 2025 においては個別プログラムアンケートが実施され、受講者によるプログラムへの評価内容がフィードバックされた^{注5)}。受講者数 9 名のところ、5 名からの有効回答を得ることができた。回収率は 55.6% である。

回答件数が少ないため個別の割合には言及しないが、全ての調査項目において肯定的意見 (「④ そう思う」または「③ どちらかといえばそう思う」) が回答された (図 7)。

本プログラムの良かった点に関する自由記述では、以下のような意見が寄せられた。

- (1) メンバーの方と一緒に企画することで楽しくまとめることができた。

- (2) 教職員の為のプログラムを考えることが初めての経験でした。グループワークで相談しつつ進めていくことが出来ることも自分一人の考えに寄るのではなく、様々な視点を取り入れられ気づきを多く得ることができました。
- (3) 保育者養成校の教員の抱える問題点の共有と、それらを解消しようとする意欲や方向性がほぼ一致していた点に安心感をおぼえた。
- (4) 個人ワークは、自分の授業を改めて振り返る機会となりました。また、グループワークでは、共通する課題を出し合い FD を企画するという作業と並行して、保育士養成



(n=5)

図 7 SPOD フォーラム 2025「保育・幼児教育分野のための FD を企画しよう」参加者アンケート

にまつわる様々な現状も情報交換することができ、安堵感が得られ課題認識が進みました。

記述の内容から、本ワークショップが①個人ワークは授業を振り返る機会になったこと、②グループワークを通して分野に共通する課題や気づきを明らかにできたこと、③同じ悩みを共有することによる不安感の軽減に繋がったことが読み取れる。ワークショップの流れとして、初めから FD 企画考案に着手するのではなく、参加者個人の課題意識を明文化してからグループメンバーでの議論に移る工程を取ることで、参加者各々が FD ニーズを把握することに繋がり、グループメンバー共通の課題の発見や不安感の解消が実現したものと考えられる。

また、改善すべき点に関する自由記述においてはワークショップのための十分な時間の確保と、FD 企画立案の段階での講師陣による具体的な助言を求める意見が挙げられた。SPOD フォーラムでは 1 コマ 2 時間という時間的制約があるため、1 コマ内で講義からワークショップの実施、報告までを行う必要があった。参加者を「保育・幼児教育分野の教員」と限定している以上、最低限の FD に関する講義や事例紹介の時間確保は必要であるが、今後、本プログラムを継続するにあたっては実施枠の拡張や講師陣の人員確保、講師人材の充実等について検討する必要があるだろう。

5. まとめと今後の展望

ここまで「保育・幼児教育分野における FD 開発」を目指し、ワークショップ試行会の実施および SPOD フォーラム 2025 でのプログラム実施について取り組み、その内容や成果を整理した。

試行会ではワークショップの流れについて確認を行い、意見交換会を通じてワークの内容見直しやワークシートの改訂を行うことができ、SPOD フォーラム当日に向けたプログラム改善の機会とすることができた。さらに試行会のワークで企画立案された FD 企画について、有志の合意が形成され、実現を目指すこととなった。

企画者視点で振り返ると、試行会を経たことによりワークショップの内容を改善することはできたものの、フォーラム当日のプログラムでは参加者の業務経験や知識、FD へのモチベーション等の違いが幅広かったことにより、議論の活性化やグループワークの円滑な進行に差が出てしまったことが反省された。今後、試行会で立案された FD の実現に向けて有志メンバーを中心に取り組むこととなるが、その際には今回の反省を基に参加教員への事前説明や情報共有を十分に行い、グループメンバーの構成についても十分に検討する必要があるだろう。

謝辞

保育・幼児教育分野の為の FD 開発の試みにあたり、本取組に快くご協力くださった有志教員の船本孝子氏（徳島文理大学短期大学部）、十河治幸氏・吉井ゆだね氏（今治明德短期大学）に心より御礼申し上げます。

注

- 注 1) 保育士資格については、それまで厚生労働省管轄であったが、2023 年 4 月からは「こども家庭庁」の管轄となった。保育所保育指針の最新版は、2017 年に厚生労働省が告示したものである。
- 注 2) SPOD フォーラムとは「大学・高専の教職員が自らの能力開発のために役立つ多種多様で質の高い FD/SD プログラムならびに組織を越えた持続的な相互交流・関係づくりの場を提供」することを理念とした四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) による FD/SD イベントである。毎年 8 月に 3 日間かけて開催され、FD/SD プログラムの提供のほか、教職員能力開発に関する研究発表や特別講師を招聘した特別公演などが行われる。
- 注 3) 矢藤 (2022) では近年対応が迫られる多様な課題として、保育の質の維持・向上、在園児の保護者と地域の子育て家庭への支援、障害を抱えた子ども、医療的ケアを必要とする子ども、アレルギー疾患を持つ子ども、貧困家庭の子ども等への支援、安全・事故防止、法令順守、個人情報保護の保護・苦情解決、保育士の労働環境などを例示している。
- 注 4) 当該プログラムは参加条件を「保育・幼児教育分野担当教員」と限定した上での募集であったが、参加者 9 名のうち、保育・幼児教育分野の事務職員 1 名、保育・幼児教育分野外教員 1 名の参加が含まれる。前者は事務職員だが FD 企画を担当する立場にあるとして参加を希望し、後者は社会福祉士養成を担い、対人援助専門職育成の観点から共通点があるとして参加を希望した。

企画者らはその参加を了承した。

- 注 5) SPOD フォーラムでは、フォーラム参加者を対象に各プログラムの参加者アンケートを実施しており、そのアンケート結果はプログラム開発や改善、イベント実施等、今後の SPOD 活動に活かすために活用される旨について回答者より了承を得ている。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領」文部科学省.
- 2) 文部科学省 (2009) 『参考資料 2 : 幼稚園教育要領と保育所保育指針の対比表』 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/030/shiryo/06022009/005/001.htm) (最終アクセス日: 2025 年 10 月 29 日)
- 3) 厚生労働省 (2017) 「保育所保育指針」厚生労働省.
- 4) 伊藤一統 (2016) 「保育学科の改革の取り組み」『人間生活科学研究』第 51・52 合巻, 5-8.
- 5) 矢藤誠慈郎 (2022) 「保育士養成の現状と課題」『日本家政学会誌』Vol.73, No.5, 279-284.
- 6) 大津泰子 (2019) 「保育士の専門性と社会的地位に関する一考察」『近畿大学九州短期大学研究紀要』(49), 20-36.
- 7) 佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子編 (2016) 『大学の FD Q&A』pp.24-28, 玉川大学出版部.
- 8) 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (n.d.) 『FD・SD コンテンツ: FD マップについて』 (<https://www.spod.ehime-u.ac.jp/overview/fd-map/>) (最終アクセス日: 2026 年 1 月 4 日)

